

校内研 1 学期の総括・2 学期の展望

I 授業研究について

5月・7月の授業研究会を通して、いくつかの問題がかなり具体的な形で浮かび上がってきた。そのことについて整理し、今後の授業研究の方向を探ってみたい。

① 道徳の授業における「基本過程」をどう受け止めるか

昨年度から論議してきたことに、道徳の時間の授業展開のあり方の問題がある。

「まず基本過程を忠実になぞることから出発し、基本過程をマスターした上で、個性的な授業展開を工夫すればよい。」という意見と、「基本過程の形式的な模倣は、授業を手際よく流すだけで、上滑りなものになる」という意見があった。そして、1学期の研究授業でその問題が一層あらわになった。

「貝がら」（上野）「ベートーベンの手紙」（桑原）の2つの授業は、基本過程に即するという点では、大きく外れたものになっていた。また、読解に比重をかけすぎて道徳の授業としてはどうなのか、という問題もでた。しかし、一方授業者としては、意図的にそういう授業をめざしたというところがある。

今後、校内研を進めて行く上で、基本過程をどうとらえるか、という問題はきちんと論議して共通理解を図っておく必要がある。そうでないと、授業の内容以前の入口の問題で不毛な論議を繰り返してしまうこになりかねない。

このことについて、「道徳研究・22」（文溪堂）に掲載されている文部省初等中等教育局教科調査官の押谷由夫氏の文章をもとに考えてみたい。

「道徳の時間をいかに充実させるか」

文部省初等中等教育局教科調査官 押谷由夫

道徳の時間を充実させるポイント（抜粋）

② 指導過程の工夫

道徳の時間における指導過程とは、子供たち一人一人が本時のねらいに含まれる道徳的価値を内面的に自覚し、主体的に道徳的実践力を身につけていく過程である。そのために、さまざまな工夫が行われるが、読み物資料を使って指導する場合特に留意すべきこととして次の事柄がある。

第一は基本形を確立することである。

研究指定校等においては、一つの共通した基本形が示される場合が多いが、複数考えてもよい。

基本的に指導過程である導入・展開・終末の各段階において押さえるべき基本的な事柄は次のことである。

導入段

階 まず、導入段階においては、子どもたちの心をいかにリラックスさせ、開かせるか。そして、本時に取り上げようとする主題に対して興味や関心を持たせていくことが求められる。

展開段階（前段）

展開段階においては、まず資料の内容を理解させることが大切である。そのために、さまざまな資料提示の工夫が行われる。そして、資料の登場人物や、ある場面を中心として、さまざまな感じ方や考え方が話し合われるわけであるそのことを通して自分自身との対話が行われる。

展開段階（後段）

普通この段階の後半においては、資料から離れて今までの自分を振り返ることが行われる。子どもたちは既に資料の登場人物や場面に照らして、自らを語っている。この語っている自分から見て、今までの自分はどうかであったか、どう考えていたのかを振り返らせたり、これからの自分を考えさせたりする。

終末段階

終末の段階においては、本時に指導しようとしたねらいに含まれる道徳的価値について、より深めた自覚ができるようにさまざまな工夫を行う。例えば、教師の説話や更なる補助資料の紹介、あるいは、子供や親の手紙や日記の紹介等が行われる。そして、それらを通して子供たちが本時に身につけた尊くて気実践力を、他の具体的な活動の中に生かしていけるようにな配慮をするわけである。

第二は、子供の実態に応じた展開の工夫である。今述べた基本形の押さえは、子供たちが道徳的価値を内面的に自覚し、主体的に道徳的実践力を身につけていくプロセスの一般的な形を述べたものである。実際には、そのクラスの実情によってその展開過程がさまざまに工夫される。

例えば、四月の段階においては、導入でゲーム的なことを行い、心をリラックスさせるのに時間を取ったり、低学年であれば、資料のてじや導入段階において全員で動作化を行ったりするなど、さまざまな工夫が考えられる。また、役割演技に時間をかけたり、話し合いを充実させたり、更には書くことを取り入れたりするなどクラスの子どもの実態に応じてその内容を具体化していく必要がある。

第三は、資料の特性に応じた展開の工夫である。読み物資料には、さまざまなものがある。一度読むだけで内容が理解できるものから、二度三度と筋を追って理解しなければならないものまで「道徳の時間」においては使用される。どの資料においても基本形で示した展開過程を考えていくのでは、無理な場合が生じてくる。資料によっては、ある場面や登場人物についてさまざまに話し合いをさせる中で自ずと自分自身との対話が深まっていき、むしろ、その部分を充実させた方が、道徳的

価値のより内面的な自覚に通じる場合もある。そのような時は、資料を離れて自分の生活を振り返るのではなく、授業終了後に道德のノートや日記などにそのことを踏まえた自らの生活の振り返りを書かせたりすることも考えられてよい。あるいは終末において、話そうとした説話や取り上げようとした補助資料などについては、帰りの会や朝の会の時間に話したりすることもできる。

このように、指導過程の基本的な事柄の押さえは共通に行うとして、それをどう展開するかはねらいの特徴や子供の実態に応じて、さらに資料の特性に応じて柔軟に対応していくことがもとめられる。

押谷氏が最後に述べられている「指導過程の基本的な事柄の押さえは共通に行うとして、それをどう展開するかは、柔軟に対応する」という考え方は大事である。押谷氏は基本過程は大きな枠組みということであり、決して一本道ではないと言っておられる。ところが、現場では、そういう柔軟さが消え、指導過程の細部まで、一つの典型におしこめようとしている。例えば、「資料の読みは1回きりで、読んだ後は、決して見てはいけない。」「価値観の類型化を行うのが先進的なすぐれた授業の形なのだ」「資料の読みに終始して、価値の一般化の時間がない授業はだめだ」「文にこだわった読みは、国語の授業だからだめだ。」等々

押谷氏の論を素直に受け止めれば、桑原先生の授業（事前研での高橋先生の授業も）そして、上野の授業も道德の授業として認められるのではないだろうか。

2学期以降の授業研究は、この押谷氏の論を共通理解のベースとして考えていきたいと思う。大事なことは、「基本形に即した授業ができたか」でなく、「その授業で子どもが本当に内面的な思考をしたか」で授業を見つめることである。

②基本過程の各段階における実践の成果と課題

①導入段階

中村学級では、学校生活のいくつかの場面をスライドで写すことを導入とした。桑原学級の授業では、ベーターベンの「運命」を聞かせることから入った。こうした工夫により、子どもたちが授業への興味関心を高めたことは事実であり、今後も積極的に試みられてよい。ただし、その場合留意すべきは、その導入の材料が次の資料による価値追求につながるものであるかどうかの吟味である。

②展開の前段（資料による価値追求）

資料の提示の仕方については、中村学級ではペープサートを使って、また、松宮学級では、紙芝居という方法で行われ、どちらも子どもたちがたいへんよく集中していた。低学年段階では、やはり、生に与えるよりいろんな味付けをした資料提示が有効である

ことは確かだろう。また、その時教師の語りかける言葉、表情の豊かさも非常に大切な要素になることを両学級の授業から学べた。

高学年での資料は、教師の読み聞かせという形であったが、特に問題はなかった。ただ、講師の建部先生から「資料は丸ごと与えたい」という指摘があった。いつも資料全体を頭において、学習が展開されるべきだということである。この点は、今後も意識したい。

この段階における価値追求の場面で、明確になった課題が2つある。

一つは、「役割演技における自己の表出」の問題である。

中村学級では、ペープサートを使って自分の思いを語らせるという場面で、もう一息本音が出てこなかった。

松宮学級では、てんぐの面・みを使って役割演技をさせようとしたが、やはり、衣装をつけることに興味がいって、てんぐになりきって自分を語るというところまでいかなかった。

これは、授業者の進め方に問題があったというよりも、そういう道具を使って役割演技をすること自体の問題性だという気がする。こういう学習の形は、確かに子どもをよこばせはするけれども、内容的にはうすっぺらになることが本当に多い。2学期以降の特に低学年での授業研究の中で、どうすれば、実質のある役割演技が成立するのかつきつめていきたい。

二つ目は、資料の読み取りにおける読解の問題である。

上野・桑原学級とも、読解に非常にウエイトを置いた形になり、それは国語の授業ではないか、という批評があった。それについては、建部先生より、「価値追求にしぼった資料の読みが行われ、そこで、子どもたちの様々な思考が行われているのであれば、道徳の授業として考えてよい。」というコメントがあった先の押谷氏の文章の中でも、資料での話し合いにウエイトがかかる授業があってもよいとしている。

だから、短絡的に「文章にこだわって読むのは道徳の授業ではない」という考え方はしないようにしたい。むしろ、その場で子どもたちがどんな思考を働かせているかをこそ問題とすべきである。

しかし、一方で、1時間のある限られた中で資料の価値追求をするのだから、当然、追求すべき場面の・内容の精選・単純化は必要となってくる。その意味では、両学級とも検討すべき部分があった。

2学期以降の授業研究、特に高学年では資料による価値追求の場面で、どう限定して深く追求するかを課題にしたい。

③ 展開の後段（価値の一般化）

「ベートーベンの手紙」の授業の場合、「他にもこういう人の話を知っていますか」という間接経験を広める形での価値の一般化もできるということを建部先生から指導していただいた。

我々が、この部分をあつかいにくい理由として、それまでの資料による価値追求と切れてしまい子どもの思考としてはつながりにくい、ということがあった。

どうしたら、資料による価値追求での思考とつながった形で価値の一般化ができるかを、この例を手がかりに、今後も考えていきたい。

④終末の段階

ここについては、それぞれの学級で、一定深みのあるものを生み出してこれたように思う。特に子どもの作文がかなりの力をもってくるような気がする。

③子どもが生きる授業をどう創造するか。 ＝教師主導型から子ども主体の学習へ＝

7月の校内研で、町教委の小泉先生の指摘された問題である。我々は、日頃、子供が生き生きと活動し主体的に学ぶ授業をめざして取り組んでいるつもりである。しかし、7月の授業研では、そのことの不十分さが、第三者の目から指摘された。これは、決して授業者の個人的な問題ではなく、我々教師が共通に抱えている問題なのだと思う。どうしても「こんなふうに活動させよう。」「こういうことを言わせよう」という教師側からの展開プランが先行し、子どもが素朴に感じ取っているもの、あるいは、つまづいているものに敏感に対応できない。これは、道徳の授業に限らず、どの教科の授業中でも共通にある問題である。二学期以降の実践研究の中でぜひ重要な課題として取り組んで生きたい。

ところで、そうした「子どもが生きる授業」の創造を目指すといっても、具体的にはどうしていけばよいのだろうか。そのことについて一つだけ提案をしたい。

授業者としての自分自身を問い直す仕事

「子どもが集中しない。」「あまり進んで発言しない」「発言の声が小さい」「人の話を聞かない。」などといった授業中の子どもの否定的な姿を、子ども自身の問題でなく、授業者自身の問題として問い直してみることである。

その一番簡単な方法は、自分の授業をテープにとってみることである。私自身、初めて自分の授業をテープに取ってその記録をおこすという作業をしたとき、自己嫌悪のあまり、5分と作業を続けられなかった。それほど、テープから流れてくる自分の声は不明瞭でくどくどしく子どもの発言とずれていた。その時、つくづく思った。「悪いのは子どもではない。自分なのだ。」と。その後自分の授業をテープに取るという仕事はずっと続けてきて、現象的には子どもが悪いと見えることもほとんどは、教師の側の問題

であるか、教師の対応で変わるはずの問題だと私自身は考えるようになってきた。

テープにとって、「本当に自分の声は、子どもの心に届くような語り方になっているだろうか。」「子どもの思考を本気で受け止めているだろうか。」「子どもが考えたい方向に展開させているだろうか。」などという問題を冷静に分析してみることで、かなり授業は変わるような気がする。

テープにとること以上に直接的な方法は、一学期に少し試みかけているミニ公開のように、他の先生に自分の授業を公開し率直な批評をしてもらうことである。一学期の場合は、お互いの学級を知り合うということが主なねらいであったが、それをもう一步踏み込んで、お互いの授業を高め合うことをねらいとしたミニ公開になればと思う。学年部単位ぐらいで、その時々授業研究してみたいような教材のある時を利用して少しずつ具体的に取組みないかと思う。

II 道徳的実践について

道徳的実践の核となるものとして、特別活動・生徒指導の二つを中心に取り組んできた。1学期の実践についての具体的な考察は、それぞれの主任でまとめてもらうとしてここでは、それ以外の中で道徳的実践に関わる成果として、水泳指導について述べる。

水泳指導の成果に学ぶ

今年は、単に体育学習上だけでなく、道徳的実践としての願いもこめて、水泳指導に力を入れた。「どの子も泳げる力をつける。」「その過程を通して、粘り強く努力しつづける体験」「友達どうし励ましあってともに伸びようとする力を育てる」そんなことがねらいだった。

そして、その成果は、見事に結実している。1, 2年で、ふしうきが全員でき、3年以上のほぼ全員が25m以上泳げ、特に6年生は半数以上が1000mを泳ぐ力をつけた。また、その過程で、どんなに一人ひとりにドラマがあり、喜びがあり、仲間の良さを感じているかは、たとえば学級通信「カマラード」に生き生きと綴られている。

何より大事なことは、ある学級・児童だけが良いのではなく、全校のどの学年・学級の子どもみんなが力をつけているということである。これは、郡の水泳記録会に何人入賞したかなどということよりはるかにすばらしい成果である。

この裏には、それぞれの学級担任の努力がある。夏休みに特別水泳教室を開くことの是非はあろうが、去年まではあまりなかった学年ごとの水泳教室が開かれ、その中で泳げる力が確実に伸びていった。

おそらく、もう1年この努力を続ければ、東小の児童の泳力は完全なものとなるだろう。

この事実から学ぶべきものはいくつもある。どの子も可能性を持った存在なのだという子どもへの信頼。全校の教師集団が一つのことに向かって具体的に取組みばこれだけの成果が出るのだということ。など。

こうした事実を2学期の取り組みの中でも生み出せれば、と思う。